

# 古代史に遊ぼう

## 第50回 ー北九州周遊ー その1 板付遺跡と奴国の丘など

年を重ね、痛い膝をひきずってなんとか続けている古代史の遺跡を訪ねる旅行は、漸く懸案の北九州周遊を果たせることとなった。その目玉は須玖岡本遺跡・板付遺跡・吉野ヶ里・岩戸山古墳・宗像大社などである。博多駅前のホテルで1泊し作戦会議と予習を行い、第1日は雨であったので、建物の中で展示を見物できるところを主にスタートすることとして、まず奴国の丘・須玖岡本遺跡を目指した。

弥生時代中期中頃以降、北部九州では戦争を繰り返しながら、共同体間に政治的な上下関係が生じ、「部族的国家＝クニ」が生じ、さらなる統合を果たしてより強大で大規模な領域国家を形成していった。これらは平野範囲の規模で部族国家が複数統合したもので、魏志倭人伝に出てくる「国」の規模である。北部九州では奴国、隣接する早良平野の早良国、更にその西隣の伊都国などはその典型である。奴国の王が伊都国の王と共に「王の中の王」であることは、いずれも王墓である甕棺墓の副葬品に中国鏡が30面以上、金銅製の四葉座金具やガラスの璧なども含まれていることから分かる。この王墓が出土した須玖岡本遺跡（春日市）には青銅器工房、ガラス生産工房、鉄器工房（鍛冶）など奴国の繁栄を支えた当時の先端かつ最大規模の工房跡が遺跡中にいくつも発見され、さらに青銅器の鋳型やルツボや銅滓など生産関係の遺物が多量に出土していることが特色である。そして、甕棺墓の王から、数世代を経て、「後漢書」に登場する王があらわれる。すなわち、建武中元二年（57）に倭の奴国の王が朝貢に来たので、光武帝は印綬の下賜をもって応えたという記事が出てくる。それが江戸時代に博多湾の志賀島で発見された金印とされている。



●写真：奴国の丘資料館

次に板付遺跡弥生館へと向かった。福岡平野の中央よりやや東寄り、御笠川と諸岡川に挟まれた標高12mの低い台地に遺跡は存在する。雨はますますひどく、遺跡周辺の丘や低地は濡れそぼり泥濘み、まるで



●写真：板付遺跡復元模型

弥生時代の景観を思わせるものがあった。板付遺跡は「最古の農村」として、日本の原風景を伝えていると云われている。この遺跡の発掘調査で見いだされた弥生早期の水田は、稲作開始期の初現的なものであるにもかかわらず、構造的には畦で区画された水田、井堰を備えた水路など、今日の水田と変わりのない完成されたものであった。板付遺跡を始めとする玄界灘沿岸地域では、弥生時代の特徴とされる諸要素、即ち水田農耕、環濠集落、大陸系磨製石器などが出そろっている。

ここから出土した板付式土器は、それまでの土器とは器形や製作技法が大きく異なっている。その中でも最も古い板付Ⅰ式土器は、夜臼遺跡（福岡県糟屋郡新宮町）から出土の夜臼式土器（縄文）の新しい段階のもの（夜臼Ⅱb式）と一緒に出土することが確認されている。土器編年法では板付Ⅰ式土器が出現する以前の夜臼Ⅰ・Ⅱa式のみが存在する時期をもって、弥生時代の開始（弥生時代早期）とみなす見解が優勢である。弥生館では土器の模型を手に取り観察できるようになっていて、展示品を見るだけとは違う実感を味わうことができた。

「弥生時代の開始年代が500年ほど遡及する」との国立歴史民俗博物館の研究チームの報告が2003年に発表された。「夜臼Ⅱ式と板付Ⅰ式の煮炊き用土器に付着していた煮焦げやふきこぼれなどの炭化物を、AMSによる炭素14年代測定法によって測定し、得られた炭素14年代を年代年輪法にもとづいた国際標準データベースにより暦年代に転換したところ、11点の資料のうち10点が前900-750年に集中す

る結果を得た」。すなわち、北九州で水田耕作が始まった夜白I式の年代は前1000年頃まで遡る可能性が出てきた。このことは、弥生時代の始期が、これまでの定説から500年ほど早まることを意味し、古代史の解釈に影響を及ぼすであろうと考えられている。縄文の自然依存の獲得経済が水田稲作の生産経済に「急速に」変わったということではなく、変化にはゆっくりと時間がかかり、縄文と弥生という異なる文化が日本列島の中で数百年にわたり併存していたと考えられる。更にその後多数の板付式土器を測定し、弥生土器は周期的に順次、形式が変化してきたと考えられていたが、形式変化に周期性がないこと、従来考えられていたよりも形式の存続期間が長いことが判明し、弥生社会の解釈は再考を迫られることとなった。

次に訪れた金隈遺跡は板付遺跡の東約2km、御笠川に沿った月隈丘陵のほぼ中央にある。弥生時代の共同墓地の遺跡で、土壇墓119基、348基の甕棺墓、2基の石棺墓が発掘されている。発掘調査された現場に屋根を掛けた展示館が建てられており、甕棺や人骨が発見されたときの状態で見学できるが、感想としては余り気持ちのよいものではない。遺跡の出土人骨は136体で、平均身長は男性162.7cm、女性151.3cmで、縄文人と比較すると、顔は面長、身長が高くなり、朝鮮半島との交流による混血があったものと考えられる。副葬品は青銅製の鏡、剣や硬玉製の勾玉、管玉などのほか、貝の腕輪などが出土している。貝は種子島からオーストラリアまでの海中に棲息するゴウホラという貝で、貝殻で作った腕輪が見つまっている。石剣、石鏃、首飾り用の玉もみつっており、ムラをまとめる首長のものであろうと考えられている。

雨が止み時間が余ったので、ドライブを試みることにする。鳥栖JCTから大分道に乗り、筑摩川に沿って東へ日田を目指すことにする。天領日田は北九州の要の地で、往古より日田を抑えれば、九州北部で西から東への侵入は出来ないとされていた。確かに東に向かうと緑の壁にぶつかる。北から南に伸びる断崖が前を遮っていて、これを越えるのは軍事的にはなかなか難しかりうと思われる。徳川幕府は要害の地日田を天領として北九州ににらみをきかせていた。日田の町を一周ドライブして見物ののち戻ることにする。途中、朝倉・甘木に立ち寄り、甘木歴史資料館を見学する。狐塚装飾古墳の解説にみるべきものがあつた。この古墳は七世紀始めのもので、筑後川右岸の河岸段丘の先端部で発掘された物である。石室の奥壁に線刻で船・人物・動物などが刻まれている。

宿に向かうべき時間となったので、大分自動車道に戻り、鳥栖で九州自動車道に入り、次の目的地柳川を目指す。誤算は雨の降り続きによる高速道の交通規制・渋滞にまきこまれたこと。途中より一般道に下りて、大川市を經由して柳川に向かう。水都柳川は降り続いた雨により、掘は溢れんばかりの水量であった。柳川で思い出すのは鰻屋である、入った店で1時間半待たされ、ありついた「櫃まぶし」は誠に美味であり、空腹は最高のソースであることを実感したのであつた。

写真をご提供頂いた吉本吉彦氏に感謝申し上げます。

- 文献 1) 春日市文化財ガイドブック 春日市・同市教育委員会  
2) 板付遺跡 弥生館図録  
3) 史跡 金隈遺跡 福岡市教育委員会



●写真：金隈遺跡 甕棺



●写真：甘木資料館